学校環境と生徒の適応の関係性

——「自主性重視」の高校で問題を生じた一女生徒の事例をめぐって——

学校教育開発学研究室　高　橋　亜希子

The interaction between the school environment and a studnt mental problems
——a case study of a female student in a "liberated" high school——

Akiko TAKAHASHI

The present paper is a case study of a female high school student. This study examined the process by which the student faced with her psychological difficulties of adjusting to the "liberated" school atmosphere and also inquired how the school environment had affected her psychological problems. The retrospective interview with this student was used as the method. Describing the inner "psychological reality" and the outer world of the "school culture", the author also examined the interaction between her problems and the school environment. In a conclusive discussion, the nature of the "liberated" school atmosphere was investigated from broader perspective.

目　次

Ⅰ　はじめに
　A　"自由への入口がわからないの"
　B　問題の背景としての"学校""学級"を捉える視点
Ⅱ　事例研究
　A　研究の対象と方法
　B　A校のあり方
　C　Bさん
　　1　A校の周囲の人から見たBさんの姿
　　2　Bさんの「高校」経験
　　　a　高校入学まで
　　　b　A校にて
　　　c　中学校との相違——不安「自分がわからない。」
　　　d　周囲との関係
　D　Bさんについての考察
　　1　Bさんのスタイル「強迫的」な防衛　親密な支え「自我の希薄さ」
　　2　小学・中学時代
　　3　高校への入学——　幾つもの違和感　目標・支えの消滅　強迫的な防衛へ
　　4　周囲の関わり——生徒からの否定像の投影・教師の支えの得られなさ
　　5　周囲の遮断へ
Ⅲ　まとめと今後の課題
　A　A校の環境とBさんの抱えた問題との関係性について
　B　"自由"な学校のあり方と二人の抱えた問題との関係について

Ⅰ　はじめに

A　"自由への入口がわからないの"

学校は現在"自主性重視"の方向に動いてきているようである。旧来の校則による管理への批判からか，鞄などの持ち物も自由になり，髪形などの規制も緩やかになりつつある。また，選択制高校の出現，受動的な学習から総合学習などへの転換など，学習面においても生徒の主体性や創造性を活かす方向への動きがあると表現して良いだろう。縛られず自由に動ける幅が広がり，伸び伸びと自己を表現できる。多くの生徒にとっては学校は以前よりもずっと過ごしやすい場所となってきたと言えるのだろう。

だが，その学校の"自由"さに馴染めず，不登校の状態へと至ってしまった生徒がいる。以下は横湯(1992)が

相談室で出会った事例であるが，それを一部引用してみたい。

「高校1年の二学期に登校拒否をして留年。今は登校をしてはいるものの，クラスメートの視線が気になり保健室で過ごしている少女が，その苦しみを『自由への入口がわからない』という言葉で表現した。

彼女の中学校はかなり管理的な雰囲気の学校，入学した高校はそれとは正反対のかなり自由な雰囲気の学校であった。教師が生徒の意見に耳を傾け，学校生活の多くの部分が生徒たちの判断に委ねられていた。

ところが彼女はそれに疲れてしまう。全校集会時の私語を注意しない教師に対して苛立ち，また，自分で判断しなければならない場面が多いのにも戸惑い，おろおろして判断ができず『先生が決めてくれればいいのに』と思い続けたという。

しばらくして気がついてみたら，クラスメートは学校生活に馴染み，それぞれに友達ができていた。彼女はそれに愕然とすると同時に『取り残され』感に襲われ，自信を失い，しだいに友達の視線が気になりだし，多人数がいる場所にはいられなくなる。彼女の言葉では『しょぼしょぼした惨めな子』になっていた。幼稚園から小学校の初めまでいじめられていて，それが恐怖感として残っていて怯えてしまうのだという。

彼女　前の学校は楽だった。いまとは何もかも正反対で。

私　カルチュア・ショックっていう感じ？

彼女　ええ，あまりにも違いすぎて。管理教育って慣れると楽。管理教育は間違いってことはテレビを見ながら考えていたし，頭ではわかっていたけど。

私　人間の生活って，頭ではわかっていたけど，だけど……っていうことって多いんじゃないかしら。

彼女　気がつかないうちに学校に頭を預けていたのかもしれない。

私　それにしても，あなたの学校は羨ましいほど自由な雰囲気なのにね。

彼女　ええ，でも，私，自由への入口がわからないんです……。」

“自由への入口がわからない”という表現。のびのびと過ごせるはずの，周囲から見れば羨ましいとまで映るほどの学校の中でなぜ彼女は動けなくなってしまったのだろうか。

横湯はこの後「かつての管理教育が問題？　自己評価が低すぎることが原因？」など推測しながら彼女に対し丁寧な心理面接を行い，一方でまた，彼女の置かれた“自由”という状況の意味についても考察を広げていく。どうして，この学校の中で彼女は立ちすくむことになったのか，また，なぜ彼女にとって自分自身で決定するということがこれほどまでに負担となったのかなど，彼女については様々な疑問点が現れる。このような，学校との関係性の中で生じた問題を考える際には，彼女自身の内面の問題に触れることに加えて，彼女の置かれた“自由な学校”という背景が，彼女の問題に対しどのような意味を持ったのかを考えていく必要があろう。本稿においては，この「自由への入口がわからない」という問題に関して，もう一つの事例を挙げ，個人の持つ情緒的な問題を学校という場との関係性の中で捉えていく視点から考察することを目的としたい。

B　問題の背景としての“学校”“学級”を捉える視点

上の生徒は，通っている学校のあり方の変化が不登校の重要なきっかけになり，横湯は，一対一の面接の場というわば伝統的な心理臨床の場において，生徒の心理内界だけでなく，生徒の置かれた外界の状況についても考察を広げざるを得なくなったと言える。

近藤（1993）も，相談室という主に子どもの内面に関わる場での相談事例を重ねる中で，その背景にある「学校」「学級」という場が子どもの問題と関係を持つものとして深い実感を持って浮かび上がってくるという経験を重ね，生徒の適応，不適応を考える際に，その子の内面だけでなく，その子が現在置かれている場との関係の中で捉える必要性を指摘している。そして，チック症状を持つ小学生の女の子が担任の優れた関わりにより急速な症状の改善を見た事例など，学校が与える影響についての幾つもの例を挙げた上で，そのような「学級」「学校」での生徒の問題を考える上での視点を提供している。

一人の子どもの生じた「問題」を「教師」や「学級」との関係で考えていく際に，近藤がしばしば目撃したのは，客観的に「良い先生」のもとで「楽しそうな学級」が展開されているのに，ある子どもにはそれは「馴染みがたい」場となってひきこもってしまう一方で，客観的には「あまり評判の良い先生ではない」と思われる先生のもとで「活気のない学級」が展開されているにも関わらず，その学級の中では子どもがある居場所を見つけて登校を再開するというような，いわば逆説的な事象で

あったという。そしてそれは，例えば一人一人がばらばらに独立して動く家庭で育った子どもが，まとまりを求める凝集性の強い集団の中で息苦しさを感じるといったような，子ども個人の持つ行動様式のスタイルと学級の場の性質との関係の元に生じていた。つまり教室の中であれば，その場の持つ雰囲気や対人関係の様式，集団の構造，また，教師が子どもに要求する行動様式などが，一人の子どもがそれまで形成してきたあり方にとって“馴染めるものか——馴染みにくいものであるのか”ということが，生徒の学校での居やすさを規定するという現象であったという。

近藤はそのような事象を「マッチング（matching）」という視点でまとめている。それは「子どもの情緒的問題を，子ども個人の欠陥のみに由来すると考えるのではなく，子どもが持つ行動様式と，子どもが所属する社会体系が要求し，期待する行動様式との間の不適合（mismatch）との現れとして捉える見方」（Apter, 1982）であり，生徒の情緒的な問題の発生を環境と個人相互の“関係性”の現れとして捉えるものである。つまり，適応や不適応の問題を環境や個人のあり方のどちらかの問題に帰するのではなく，相互の「組み合わせ」を問題として取り上げる点がその特徴となっている。

その情緒面における例としては，例えば5代続いた農家の封建的な価値観の中で成長した女児が，暴君的な担任教師とは，“相性”が良く登校できていたが，作文指導や民主的な学級経営を行う担任教師とは“相性”が悪く，登校拒否に至ったという山本（1975）の報告がある。また，学校の学習面での指導方法と子どもの行動様式の関係を見るならば，心理的に不安の高い生徒は，児童中心のアプローチなどの非構造的な学習環境よりも，寧ろ高度に構造化された学校の中で高い学力レベルを示すという知見（Brophy & Good, 1974）などが挙げられるであろう。（そして，上の枠組みに基づく実証研究としては，学級での教師の“要請”と学級での生徒の適応との関係を実証した近藤・沢崎他（1988）の研究が挙げられる。）

上の例は「学校（学級）のスタイル」と「個人のあり方」との二つの比較的単純な関係を示したものであるが，この姿勢は基本的には「環境と個人の両方に対してその特性を木目細やかに探究する姿勢を促進する」ものであるという。つまり，冒頭の彼女にこの姿勢を適用するならば，まず彼女の置かれた“自由な”学校の質をきめ細かく見，次に彼女の内面の発達についても詳細に検討し，最後にそれがどのような“関係”の元に彼女の問題を生じさせたかを検討するという，先程示したような姿勢に繋がっていくものとなろう。“自由”な学校が何故彼女にとって辛いものとなったのか，それについては横湯と彼女との会話からもある程度推測することができる。ただ，残念ながら，横湯の記述の中からは彼女のより深い背景やその後彼女がどのようなプロセスを経たのかについては知ることができない。そこで“自由な”学校の中で苦しい体験をしたもう一人の生徒の事例を挙げ，彼女がなぜそのような状態へと陥ったのか，彼女の内面の側のプロセスと学校との相互作用を記述しながら考察を行ってみたい。

Ⅱ　事例研究

A　研究の対象と方法

本事例はある国公立の女子校Ａ高校の卒業生45名に対し，卒業７年後から回顧的に自身の高校経験について面接調査を行った中の一事例である。調査は平成９年度６月から10月にかけて行われ，調査の趣旨は学校内での個人の自己形成過程について主に個人の「内的な経験」の側から接近することにあった。面接は半構造面接の形で行われ，手順としては，高校についての個人の「テーマ」をまず聞き，そこを起点としてライフヒストリー的に学校史，家庭環境などを遡って尋ねた。また，各自の内面に映った「学校」の姿を捉えるに当たっては，吉崎・水越（1979）の“学級雰囲気”に関する質問紙を改訂し面接の中で用いた。45名は対象学年の３分の１に当たる人数となっている。

B　A校のあり方

学校は一つの単位として扱うにはいささか大きすぎるかもしれない。個々の教師の指導も異なれば，クラスの雰囲気も，そして一人一人の生徒の捉える学校の姿も少しづつ異なるからである。ここではあくまで学校の全体的な特徴を“紹介”する形で記述を行うこととする。またここに描かれているのは，学校の本当に表層的な特徴であることも付け加えておく。

Ａ校は公立の女子校である。系列校から持ち上がりで入学する生徒が半数であり，残りの半数は入学試験を経て高校から入学する。生徒数は全体で400人前後の小規模な高校である。進学校としても知られている。校舎は古い，木造の一戸建てである。

Ａ校の校風は“自由”であることがまずは大きな特色となっていた。校則や制服は存在するが，服装面でも髪形においても規制はほとんどなく，大幅な自由が認め

られている。生活上での禁止事項もほとんど存在しないため，生徒は校外の売店へ足を伸ばしたり，休講時には外出してしまったりもする。教室内には一面にポスターが貼られ，マンガが山のように積まれている。掃除もあまりなされず，床には塵が積もり，ごみ箱にはごみがうずたかく積まれている。あまりの乱雑さに目を疑うほどであるが，生徒もある程度以上は散らかすことなく，一定の秩序が保たれていた。

授業は比較的オーソドクスな形態の授業である。教師が講義を行い，生徒はそれに答える。担任の教師は朝に5分ほど話すが，その後はほとんど顔を見せない。そのため一つの授業が休講となると，最終の授業担当の教師に頼み，授業を移して先に帰ってしまうようなことも生じた。

生徒は普段の生活においてはこのように気ままにも見える過ごし方をしているが，学校行事の運営は生徒が主体となって行っていた。文化祭，体育祭，球技大会の運営，予算の決定，など。そして，その中で体育祭での応援，文化祭でのミュージカルの上演，コンクールでの創作ダンスの披露など，水準の高い活動が展開されていた。また，生徒の提案で球技大会が開始されたりなど，生徒の側からの企画が多いのも特徴であった。

もちろんすべての生徒が行事に対し積極的なわけではなく，参加せず先に帰ってしまう生徒もいる。自分の都合で動くマイペースな生徒も多いが，ただそれだけではなく，個々の生徒の活動の方が寧ろ活発であるのが特徴となっていた。新聞の学生特派員として海外へ行く生徒もいれば，新聞に論文を投稿するものもいる。その一方で，読書が好きで一人でただ黙々と本を読むような生徒もいる。このように個々人の方向性はいささかまちまちであるが，「自分一人で」で何かを始めていくことは共通していた。それはまた集団の規範に反映され，「自分で」「独力で」何かを行うこと，また，どこかに自分らしさのようなものを持つことが望まれるような雰囲気となっていた。そしてそれは生徒の行動様式が形成したものでもあったようである。自分の意見をはっきりと言う生徒が多かったが，周囲に頼らず，自分で物事を引き受けていくような，“強さ”を全面に出していくような姿が一つの特徴となっていた。

だが，生徒同士の仲は良い。それは，生徒の半数が既に知り合いであること，また，生徒数が少なく，知り合いやすい構造になっているためかと思われる。そしてグループを形成しても，その枠は緩やかで，個人がそれぞれに友人関係を結ぶような形になる。そのため，生徒集団は一人一人の「個人」が集まったようなゆるやかな形となっている。

このような中で，教師はあまり生徒のすることに口を挟まず，一定の距離を取り，求めに応じて必要な援助をするという姿勢を取っている。指導については，大体においては「外の世界でもおかしいとされることは注意する」という姿勢である。例えば生徒が授業中にジュースを飲むような際には注意する。ただ，指導の方針や基準は教師によっても分かれるところとなっている。

教師は生徒に注意や指導を行う役割を取らないためか，生徒との関係はより対等で，フランクなものとなっている。生徒が食べているお菓子を少し教師がつまみつつ話に加わることもある。教師と話をしたい生徒は，教官室や教科指導の部屋を個人的に訪ねていく。校舎が小さいためか，落ちついた家庭的な雰囲気も醸しだされ，生徒の中には学校の居心地がよく，放課後にずっと居残る者もいる。進学に関しても，高校側はあまり積極的な指導は行わなず，志望校の決定も，進学の指導も，生徒の主体性が尊重された形となっている。ただ，自分からあまり教師に対して働きかけないタイプの生徒には，教師のかかわりは近づき難く，そっけないものとも映るようである。

だが，この自由は学校側の意図的な働きかけにより成り立ったものではないという。教師の多くは「どうしてこうなっているのかわからない」という。進学校の校風が比較的“自由”であることはよく知られるが，A校での“自由”は，学校規模の小ささと生徒の性質とのバランスの中で徐々に形成されてきたもののようである。

C　Bさん

1　A校の周囲の人から見たBさんの姿

眼鏡をかけて，髪は短かめ。茶色のセーターを着ていることが多かった。制服通りのきちんとした服装というわけではなかったが，A校の中では地味な印象があった。

高校1年の中頃から，いつも一番前の席に座り，休憩時間も勉強していた。5分間の休憩でさえ参考書に向かっていた。そして予備校に週5日通っているとか，予備校で成績が抜群であると噂されていた。進学校であるので，勉強することは殊更隠されるようなことはなかったが，クラブ活動や委員会，また自分の趣味などと並行させながら，グループ同士で勉強をする生徒が多い中，友人を作らず，学校での活動にもあまり加わらず，周囲を遮断するように勉強するその姿は異質なものと映った。

「友人を作らず勉強ばかりしている」というのが周囲

がBさんに抱いたイメージである。その姿は，大学進学のために今から猛勉強をしているのだろうと捉えられ，冷やかに見られていた。だが，そのような人も中にはいるのだろうと学校の中では特に疎外されることはなかった。

だがBさんと直接話をする機会のあった生徒は，周りの“ガリ勉”的なイメージとは違う，普通の穏やかな人であると感じたという。また勉強とは裏腹に，結局は志望の大学とは異なる大学へと進学していった。そのため，周囲は理由がわからず意外に感じた。

2　Bさんの「高校」経験

Bさんにとって高校での経験は非常に辛いものであったという。実際は高校に通うことさえも辛かったのだという。「中学校はすごく厳しい学校だったから，高校へ行ったら楽しくなるだろうと思っていたのに，自分からそういう生活を壊してしまった。もっと，友達とかと遊んだり話したりすれば良かったのに，自分から拒絶してしまった。」とBさんは語る。彼女の内面に映った高校の姿と高校までの生育史をここでは記述することとする。

a　高校入学まで

Bさんの家は，中流の会社員の家庭である。Bさんはその一人娘として生まれた。

父親の姿についてはあまり明らかではない。その一方で母親の姿はBさんの話によく現れる。母親のBさんに対する躾けは一貫して厳しかったと言う。その厳しさは，社会的なルールを厳しく躾け，守らせるという形よりも，寧ろ周囲や世間の目を非常に気にかけ，Bさんの失敗に対して厳しく叱るという形のものであったという。Bさんが幼い頃の最も印象的な記憶として語ったのが，幼稚園での発表会の折りのエピソードである。たまたま，Bさんが一人他の児童と反対側の手にカスタネットを持って叩いていたところ，それを見た母親に「お母さん，すごく恥ずかしい。あなたも（自分を）恥ずかしいと思いなさい」と叱られたというものである。母親はBさんにとっては一貫して「自分の考えを押しつけてくる人」であった。Bさんの自分自身を否定的に捉えていること，自信の抱けなさ，そして自分を抑制する態度は一貫してBさんの話の中から伺えた。

幼稚園も“躾けの厳しい”幼稚園であったという。「皆と同じことができないと叱られたり，一人ではみ出したことをしたりすると叩かれた」というのがBさんの記憶の中の幼稚園の姿である。

小学校は地元の公立学校に進学する。小学校では担任の先生に恵まれたこともあり，比較的普通の楽しい学校生活を過ごした。

そしてそのまま地域の公立中学校に進学する。そこは，絵に書いたような，管理の非常に厳しい学校であった。いわゆる“不良”的な生徒が多かったこともあるのか，持ち物検査，髪の長さの規制，スカート検査などがあり，何につけても教師の指示通りに動くことが求められた。管理に反発する生徒達もいたが，Bさん自身は教師の指示に従って動くことも，また厳しい規則もそれほどは気にならなかったという。その中で自分なりの生活を過ごし，学級委員などを務め人前で話すような機会や，小説を読むなどの趣味もあった。現在から振り返ると，ゆったりとし，「結構居心地の良い」生活であったという。

中学時はBさんは塾に通っていたが，寧ろそちらで過ごす時間の方が充実していた。小さなクラスで親身に指導する近所の塾で，そちらの方に仲の良い友人がいた。進学指導の塾であったが，クラスの中で互いに張り合うというよりは共に互いの目標へ向けて励ましあうという雰囲気であり，また塾の面倒見の良い指導には「先生がついていてくれる」という安心感があったという。彼女はその中で受験勉強に専念した。一日中勉強をしていても飽きることはなく，何かに集中する充実感のみがあったという。

Bさんの志望校はA校であった。A校について知ったのは小学校時であり，父親がよくその名を口にするのを聞いて，いつしか名前の響きが気に入り行きたいと憧れるようになったのだという。彼女はイメージの中でA校を「勉強もするし，でも楽しそうな。あんなに自由っていうイメージはなく，お嬢様的に管理もある程度あって。でも，中学ほど厳しくはなくて。本当『花の女子校生活』のように思い描いていた。」と語った。

勉強の甲斐あり，Bさんは受験を経て無事に志望校のA校に合格する。そして，入学式の日を迎えることになる。

b　A校にて

ところが，入学式の場でBさんが見たのは，憧れていたイメージとは全く違うA校の姿であった。Bさんはまず入学式で会ったA校の上級生達の姿に衝撃を受けた。

「みんなは多分，自由なのに憧れてる。憧れているんじゃなくて，A校の大部分の人は自由な方がいいと思っていたかもしれない。でも，私はわりと，ビシっ

としている方が好きで，私立の学校とかみんな綺麗にして同じ恰好をして，逆にああいう方が気持ちがよくて。スカートが短かったりとか，パーマかけてたりとか。特に派手だったのがすごくショックだった。（校舎の中も）ああいう雑然としたところが嫌だったというか。」

イメージの中のA校とは正反対の“派手”で気の強そうな上級生の姿，また校舎の中の雑然とした姿に強い違和感を感じ，このようなところで自分はやっていけるのだろうかという不安からBさんの高校生活は始まることになった。

また，Bさんの一年時のクラスは，入学して数日後に中学校から入学した生徒にとってかなり大きなある事件が生じ，クラス内が非常に動揺した。そして担任と内部から進学した生徒との間で事件に対する見解の相違が生じ，2学期に至るまでかなり長期間に渡り緊張状態が続いた。そのクラスの状態もBさんには非常に不安に思われたという。

そして，BさんはA校の授業に対しても違和感を感じた。A校の授業は割合オーソドックスな形態のものであるが，進度は比較的早い。また相対性理論の概略から物理の授業が開始されたり，生物では最新の遺伝学についても伝えたりなど，順序立てた説明を行うよりも，教科のエッセンスを伝えることを重視するような授業もあった。そのような説明はBさんには非常に掴みにくいものであった。

「全く系統立ってやっていなかったような気がして。なんかぐちゃぐちゃな授業だったような。予備校とかは単元を決めて説明したから，わかりやすかったけど，A校の授業はよくわからない感じがあった。」

数学の教師も，ベクトルの説明を輪ゴムを用いて行うなどの工夫した実践を行っていた教師であったが，その授業に対し最も強い違和感があったという。得意科目の数学が理解できなくなったこともBさんには非常に不安に感じられた。

c　中学校との相違――不安「自分がわからない。」

これまでに述べたような様々の違和感に加えて，A校の中でBさんはもっと大きな不安を感じていくことになる。

「中学の時は周りも一緒に頑張っているような感じがあったのだけど，高校入ったらすごい孤独になってしまったというか，一人で空回りしてるというか。安心感がぜんぜんなくなってしまって，なんだろう，自分の居場所がない，みたいな。」

中学時はA校に入学するという明らかな目標があったが，目指すA校に入学したことで，その目標は失われた。その方向喪失感は非常に大きかったという。また，Bさんの期待と違うA校の姿に失望し，「やめれば良かった」という後悔の念も生じ始めていて，次の新たな目標を見出すことも簡単にはできなかった。大学進学についてはBさんは私立の大学でも良いと考えていたが，母親はとにかく国立大学へ進学するようせき立てた。それで学習への意欲も失われ，いわゆる「バーンアウト」の状態へと陥っていったのだという。また，中学時には塾の友人や教師の密接な支えがあった。高校に入学したことで，その「支え」が失われたことは何よりも大きかった。

「高校に行って，それがなくなったのが一番大きかった。すごい弱い，弱い人間だったからだと思うんだけど，そういう支えみたいなものが無くなってしまって。それで多分駄目になっちゃったんだと思う。」

クラスは先述したような状況であり，また，高校の教師の指導はBさんには生徒に対して無関心なものと思え，中学時のような“親身についていてくれる”という安心感は得られなかった。また，通い始めた予備校も大人数であり，中学時の塾で得られたような安心感とは程遠いものであったという。

Bさんは焦りの度を深めるが，その「自分がわからない」という混迷の中で，親の『声』が聞こえてくることとなる。

「母親が，自分の考えを押しつけてくる人だった。結構『恥ずかしいと思いなさい』という感じの人だったから。（何を？）いろんな私の行動を。例えば，小さい頃はテストで悪い点を取ったりすると怒られた。失敗ということに凄く厳しかった。だから余計に自分を縛りつけていたという感じで。

幼稚園から小学校までずっとそうで，中学校の時はある程度自分自身が充実していたから親のことは全く気にならなかったのだけど，高校に入って自分がよくわからなくなったら，また気になりだした。こうしな

くてはいけないみたいな感じで。」
（どんな？）
「自分が，いい大学に行かなければいけないという。」

その『声』に従うように，高校の１年の後半，そして２年３年と，Ｂさんは周囲が見たように，一番前の席に座っての猛勉強というあり方を示していくことになる。

d　周囲との関係

Ｂさんは周囲から冷やかに見られていることも知っていたという。「必死だね，歩くのも必死だね」とクラスの人に言われたことを記憶している。Ｂさんは自ら友人の中に入ろうとしなかったわけではない。入学した直後は，友人を作ろうとクラスの有志の活動のミュージカルにも参加もしたが，どうしても安定した友人関係を結ぶことはできなかった。その後は，誰が近づいてきてもＢさんの方から拒絶してしまったという。

初めのトラブルを越え，周囲の生徒は徐々に友人関係を結び，クラブ活動などを通じそれぞれに活き活きとした高校生活を営み始めていた。焦りの中で身動きのとれないＢさんは，周囲の生徒がバランスよく幾つもの活動をこなしていくのが不思議であった。そして，周囲の生徒は「要領が良く」引換え自分は「けじめのない」人間なのだと思った。

彼女には周囲の生徒達が羨ましく，自分からそのような「空回り」を断とうと試みたりもしたが，その試みはうまくいかなかった。

「遊んでみよう，とか，友達を作ってみよう，ともしたけれども，結局元に戻ってしまう。どうして自分にはできないんだろうと思ったけど，考えても全くわからなかった。そうそう，いろいろグループがあって，その中で勉強したりしているのがすごく羨ましかった……。自分でもよくわからない。入っていけば良かったのに。何故だったのかよくわからない。」

Ｂさんの担任教師はＡ校の中でも比較的生徒に関わっていくタイプの年配の女性教師であり，Ｂさんに対してもかなり様々に働きかけた。「一番うしろの席に座って周りを見てみなさい。」「勉強ばかりしていないで，もうちょっと周りと接してみたら。」「もうちょっと要領よく」など。だがそれはＢさんが意識して心掛けても叶わないことであり，なぜ自分だけこのように言われ続けるのだろうと，かえって担任への反感を残した。

学校の行事には一応の参加はしていたが，文化祭などの時には，喫茶店で時間を潰していることもあったという。そのような自分自身の状態も心苦しく，周囲の生徒に対して「負けたくない」という反発も生まれ，それも空回りしたという。

（周囲に負けてしまうような感じがあった？）
「あ，それはすごくあったと思う。男子校みたいで，みなすごく個性が強くて，人間的にもすごく独立していたというか。強くて。私は本当に弱い，弱くてすぐ潰れてしまうような人間だったから，この中で３年間やっていったらどんどんだめになってしまうなと思って。それで，多分溶け込めなかったんだと思う。弱いし，個性も弱いし，だからああやって拒絶していたんだと思う。弱い人間にみられたくなかった。
　高校に入ったときに皆が個性の塊だということを感じて，わりとそれがコンプレックスだった。自分が自慢できるものを持っていないというか。自分に自信のない人だね，って言われて，だから余計にあのように振る舞うしかなかった。」
（成績が良かったとしても？　Ａ校に合格したとしても？）
「それはだれでも頑張ればできる。飛び出るものがないというか。すごい不安だった。未だに。自分に自信を持った時期って一度もなかった。」

高校の３年間結局Ｂさんのあり方が変化することはなかった。

焦りと不安の中での勉強は結局身にはつかず，成績は上がらなかった。そして受験では第一志望と異なる大学へと進学した。

大学を卒業した後，現在Ｂさんは会社員として働いている。だが，高校での経験は苦しいものであるという。卒業アルバムは現在も見ない。「高校時代を解決しないと，自分が解決しないような気がする。」

D　Ｂさんについての考察

Ａ校の闊達な環境は，Ｂさんにとっては“自由”な場とはならず，かえってＢさんを孤独へと導くものとなった。Ｂさんは，家庭においても，幼稚園においても「厳しい」「はみ出すことを許されない」というある種強迫的な様式の中で成長している。そのＢさんが枠組みの緩やかなＡ校の中で不適応を起こすことになった図式は，「高校」経験の中からも容易に捉えることができるだろう。だがそれ以外にＡ校の中で明らかとなった彼女自身

の問題が存在したように思われる。彼女のＡ校での経験とその背景についてここで考察を行う。

1　Ｂさんのスタイル 「強迫的」な防衛　親密な支えの必要性 「自我の希薄さ」

まず，Ｂさん個人の姿について考えるならば，Ｂさんの示す特質の一つとして強迫性を示すことができるだろう。それは，入学時の「みな同じで，ビシっとしている方が好き」という言葉に見られる画一性を好む心性，また構造化されないＡ校の授業への違和感など様々の点に現れている。また，もう一つの特質としては，Ｂさんが常に周囲の親密な支えを必要としたことが挙げられる。小学校時は担任教師の支えがあり，中学時は塾の教師や友人の支えがあり，そして高校ではその支えを失い，崩壊していくことになる。その強迫性の源に，家庭での母親の躾けの厳しさ，また「他の人と違うことをすると怒られた」という幼稚園のあり方など，彼女の置かれた比較的抑圧的な環境の要因を一つ見ることができるだろう。

だが「強迫的」という言葉は防衛のスタイルを示すものであり，その中には不安が内在すると言われる。おそらく幼児期からＢさんには既になんらかの内的な問題も存在していたのだろう。筆者はＢさんと直接対面した時に，存在感の希薄な感じを強く受けたが，自信のなさなどの自己不確実感，失敗への恐れ，不安の高さなど，彼女の訴えの核となるものは（おそらく母親との関係の中で）この時期にすでに準備されていたのかもしれない。それゆえに周囲の密接な支えを必要とし，自らを脅かさないような明確な安定した構造を求め，そして外側の枠に自分を押し込め自らを守る様式を身につけたのかもしれない。

2　小学・中学時代

Ｂさんは中学時代までは，比較的普通の楽しい学校生活を過ごすことができた。小学校時代は担任からの情緒的な支えが得られたこと，またその時代が自体問題が比較的現れにくい時期であったことがあるのだろう。そして，中学時代はその“管理教育”がＢさんにとって親和性のあるものであったこと，また塾という支えが存在していたことから，彼女の抱えた問題はあまり表には現れず，穏やかな生活を過ごせたのだと思われる。

中学で彼女は進学のために塾に通う。それは彼女にとって大きな転機となる。Ｂさんには，小学校時から「Ａ校」への憧れが生じていた。その憧れの生じた要因はわからないが，「お嬢様的に管理もある程度ある，花の女子校生活」というＢさんの憧れたＡ校のイメージは「統制がとれた，穏やかな環境の学校」という，Ｂさんを脅かさない，望む形の学校の姿を示していたのと思われる。塾の教師の指導は彼女には非常な安心感を与え，友人からは仲間としての支えが得られた。その幾重もの支えと，Ａ校というはっきりした目標のある中で，彼女は安定と充実した手応えを得て勉強に集中する。この体験は彼女にとって非常に印象に残るものであったらしく，面接の中でも繰り返し「中学時代のように何かに集中する感覚を得たい」と語った。高校において彼女が頑なまでに“勉強”に固執したのも，この時の充実感が彼女にとってはおそらく忘れがたいものであったからであろう。そして，Ｂさんは無事合格し，成功体験を得る。だが，それは彼女の抱えた問題を幾重にも守りながら，高校という先の段階へと先送りしてしまうことにもなった。

3　高校への入学――　幾つもの違和感　目標・支えの消滅　強迫的な防衛へ

Ｂさんは入学式を迎えるが，ところが憧れのＡ高校は，その時点からすでにＢさんに様々な違和感を抱かせるものであった。上級生の“派手さ”への戸惑い，雑然とした校舎への嫌悪などを入学当初から強く感じることになるが，Ｂさんの持つ強迫性やそれまでの学校経験を考えれば，彼女にはＡ校の「自由さ」が簡単には馴染みがたく，また相いれないものであったことは想像できるだろう。入学したクラスは不安定な状態であり，また，Ｂさんには曖昧とも思えるＡ校の授業にも拒絶感を抱いた。彼女は自分の期待と実際のＡ校の姿とのギャップに「やめれば良かった」という失望さえ感じる。

だが，高校ではもっと本質的な行き詰まりがＢさんを待ち受けていた。Ａ校に入学したことで，当然のことであるが，まず，中学時の「Ａ校へ合格する」という目標は失われることになった。“枠”を求めるＢさんにとってこの明確な目標という方向性が失われたことが大きな痛手となったことは容易に想像できるであろう。そしてＡ校への失望や後悔も生じ，Ｂさんは深刻なバーンアウト状態へと陥っていく。また，それ以上に中学時の塾での親密な教師や友人を失ったことが彼女にとっては大きかった。Ｂさんを保護した支えを失い，Ａ校の中ではそれに代わる新たな支えも得られず，そして「自分がよくわからない」というまでの自己崩壊の危機に至っていくことになる。その中で，Ｂさんの自我の深奥部にあった母親の『声』が現れる。既に逆らう力も失っていた彼女は，強迫的な学習というそれまでのスタイルを強めた形の硬直した防衛を取らざるを得なくなっていく。

4　周囲の関わり――生徒からの否定像の投影・教師の支えの得られなさ

Bさんは憑かれたように勉強に向かうが，それは焦りの中落ちつかぬままとにかく本に向かうというものであり，当然頭の中には残らず，また中学時代の充実感とは程遠いものであった。

そして彼女にとってそれはやむを得ずに行った防衛ではあったが，その姿は進学校の中では「今から大学受験の勉強をしている」と却って周囲の否定像の投影を受け，彼女の孤立をますます深めることになった。Bさんは「居場所のない」「一人空回りしている」感覚を強く抱き，彼女自身も「要領の悪い」自らを変えようと試みる。だが，内面の問題をそのままに，表面的な行動のみを変えようとする試みは成功しなかった。

そのようなBさんに対し担任教師も様々に働きかけているのだが，「勉強ばかりしないで周りと接しなさい」などの一連の言葉は彼女の固い防衛を“壊そう”とするものであり，かえって彼女の防衛を強めることになった。その言葉も，教師との信頼関係に裏打ちされたものであったならば，彼女には十分な支えとなったかもしれない。だがそれがなかったため，その言葉はBさんには自分への非難としてしか受け取れなかったのだと思われる。

5　周囲の遮断へ

さて，彼女に対して否定的なまなざしは向けながらも，最も彼女の身近にいて，彼女の問題に気づき，“支え”となる可能性があったのは，周囲の生徒達であったはずである。Bさんも始めは友人を作ろうと有志の活動に参加しているが，その後は寧ろ自分から周囲を切り離していく。どうしてBさんはそのような行動を取ったのだろうか。

最後にBさんが語った言葉は印象的である。「周囲の人が個性が強くて，人間的にも独立していて，強くて。私は本当に，弱くて，すぐ潰れてしまうような人間だったから，ああするしかなかった。弱い人間に見られたくなかった。」と。

それまでの全ての支えを失い，内面に抱えた弱さのままに周囲と向き合わなければならなくなったBさんには，A校の周囲の生徒達の姿は，抗しきれないほど“強く”，自らを押し潰すものと映ったのだろう。そして関係を結ぶどころではなく，とにかく周囲を自分から遠ざけるため周囲を遮断する形の防衛を取らざるを得なくなったのだと思われる。

そして，その押し潰されそうな圧迫感は一方で周囲の生徒達への対抗意識にも転じ，とうとう卒業時までBさんのスタイルを変える機会は訪れなかったのだと思われる。

Ⅲ　まとめと今後の課題

A　A校の環境とBさんの抱えた問題との関係性について

ここまでBさん個人の経たプロセスをBさんの生育史に側する形で見てきた。冒頭で，生徒の問題の発生を学校という置かれた環境との関係性の中で捉えるという視点を挙げたが，A校という場の性質と，それがBさんに与えた影響についてここで考察を行ってみたい。

まず，A校の中でBさんが様々に感じた違和感は，A校の枠組みのゆるやかさとBさんの強迫性の間で生じたミスマッチと表現することができるであろう。それはまずA校への生理的なほどの拒絶感を生み，構造化されない授業や校内の乱雑さなどへの様々な違和感はAさんの不安に転じ，入学への後悔をも生じさせるものとなった。そしてこれは推測でしかないが，幼い頃からずっと自分を抑制し続けてきた彼女にとっては，A校の“自由”な環境は自らを広げる空間を保証するよりは，そこでどのように動いて良いのかすらもわからない空間だったのではないかとも思われる。

そしてより大きくは，A校の学習面でも生活面でも生徒の自主性にすべてが委ねられた，ある種生徒“個人”の力を前提としたあり方が，ある“弱さ”を抱え，支えを必要としたBさんにとっては非常に負担となったことが基底には存在していたのだと思われる。A校のあり方は，多くの生徒にとっては恵まれた環境を提供したが，詳細に見ると個々の生徒がそれぞれに“主体的”に動くことが，様々の点でその前提となっている。生徒は，自ら学習し，自ら様々な活動を行い，そして自分なりのペースで物事を進めていかなければならない。それは大多数の生徒が十分行える程度のものであり，通常の発達を経ていれば十分に耐えうるものであったのだろうが，内在した問題を抱え，しかも支えを失ったBさんの自己には，それすらも非常な負担となり，周囲から自分を切り離さざるを得なくなったのだろう。

このようにBさんの事例においては，彼女が本来内在させていた問題が，置かれたA校という状況の中で発現されたという側面と，彼女の生来持っていた強迫的な防衛様式と枠組みのゆるやかなA校のあり方との合わなさという二つの側面があったように思われる。この二つが相互に絡み合いBさんのA校での状況が生じたとするのが適切な捉え方であろう。

Bさんのイメージの中で望んだような「穏やかで，ある程度の管理のある」形の高校であったなら，規則と暖かさに守られながら（いずれは何処かの時点で問題に向き合う必要があったであろうが）自らの作り替えに必要なサポートを得られていたかもしれない。だが，あまりにも問題が浮き彫りにされる状況に置かれたことで，却って周囲を遠ざけるために非常に硬直した防衛を取らざるを得なくなり，その姿は，“進学校”という文脈の中では周囲の否定的な眼差しを受けるものとなった。そして，また支えを得られにくくなるという循環に陥ってしまったことは，Bさんにとっては非常に不運なことであったと思われる。

B “自由”な学校のあり方と二人の抱えた問題との関係について

最後に，冒頭の事例の生徒とBさんの二人が置かれた生徒の自主性を重視するような学校のあり方と二人の問題の関係性について，紙数の限りではあるが考察を行ってみたい。

近藤（1993）が相談室の中で多く見かけるのは，いい子で，指示待ち的で，受け身的な行動様式を持つ子たちが「自分の足で歩く」「自分の頭で考える」という思春期の状況的な要請の中でブレイクダウンする姿であるという。他の生徒に対しては思春期にふさわしい活躍の場を提供したA校の場は，内的な不全感を抱えたBさんにとっては容易に用いることはできないものであった。また冒頭に挙げた例の生徒は自ら選択し，決定することへの葛藤を抱えた。近代になり成立した“自由”が，“自立した個人”を前提とすることは多くの人に指摘されることであるが（乾1986，佐藤1993，R．ベラー1991他），Bさんも冒頭の彼女も共につまずいたのはこの“主体性”の問題であったと言えるであろう。もしかすると彼女たちの学校の他の生徒もそこまでの自己確立には至っていなかったかもしれない。だが，少なくともある場の中で活き活きと動いていけるためには，他の成員とあまり変わらぬ自我の強さを有すること，また不安なく動けるような安定した内的な基盤が存在していること，また自発的に活動できるだけの自信や自尊心が必要とされるのだろう。

“自由”は個人を外から支える枠組みが緩やかになるため，その生徒の持つ本質的な問題がかえって浮き彫りとなりやすい側面も持つ。現在学校制度は全体的に自由化の方向へ流れており，その政策面については佐藤（1999）が批判的な検討を行っているが，それが実際の生徒個人の心理的な側面に対してはどのような功罪を孕むものであるのか，また，それに対して新たにどのような援助が可能であるかを考察していくこともまた必要とされるのだと思われる。

（指導教官　近藤邦夫教授）

付記

研究の指導を頂きました近藤邦夫教授に深く感謝致します。

そして，辛い経験であったにも関わらず，高校での経験について筆者の質問に一つ一つ丁寧に答えて下さったBさんに対し心からの感謝を申し上げます。

参考文献

R，N，ベラー　島薗進他訳　1991　心の習慣――アメリカ個人主義のゆくえ　みすず書房
乾彰夫　1986　自立に向かう旅　大月書店
近藤邦夫　1993　教師と子どもの関係つくり――学校の臨床心理学　東京大学出版会
近藤邦夫他　1988　教師－児童関係と児童の適応――教師の儀式化の観点から『東京大学教育学部紀要』28
佐藤学　1993　子ども中心の教室を訪問して――アメリカの二つの学校から『授業の世界　アメリカの授業と比較して』 79-103
佐藤学　1999　新自由主義のカリキュラム改革を越えて――実践的ディスコースの政治学――　日本教育社会学会国際カンファレンス発表論文集
山本和郎　1975「学校に行かない子」佐々木正美ほか『いわゆる登校拒否児について1』安田生命事業団
横湯園子　1992　不登校や中退者は学校の何を拒否しているのか　季刊高校のひろば　No.3－6　26-34
吉崎静夫・水越敏行　1979　児童による授業評価　教授行動・学習行動・学級集団雰囲気の視点より　日本教育工学雑誌　4　41-51
Apter, S. J. 1982 Troubled Children/Troubled Systems, Pergamon Press, Inc.
Brophy, J. E.& Good, T. L. 1974 Teacher-Student Relationships: Causes and Consequnces, Holt, Rinehart & Winston.（浜名外喜男他訳『教師と生徒の人間関係』北大路書房